

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 金水敏,田中ゆかり,岡室美奈子
編『ドラマと方言の新しい関係-『カーネーション』
から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ-』

金水敏

著『コレモ日本語アルカ?-異人のことばが生まれると
き-』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金水, 敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000798

金水敏, 田中ゆかり, 岡室美奈子 編
『ドラマと方言の新しい関係
—『カーネーション』から『八重の桜』、
そして『あまちゃん』へ—』
2014年3月 笠間書院
A5判 103ページ 800円+税

金水敏 著
『コレモ日本語アルカ？
—異人のことばが生まれるとき—』
そうだったんだ！日本語
2014年9月 岩波書店 A5判 xiii+220+18ページ 1,800円+税



金水 敏

2014年には「役割語」関連の図書が3冊出版された。そのうちの2冊について紹介する。
『ドラマと方言の新しい関係』は、金水の科学研究費「役割語の総合的研究」に基づき、2014年3月22日に早稲田大学小野講堂で実施した書名と同タイトルのシンポジウムの記録を骨子とし、注釈や補助資料を付け加えて小冊子としたもの。シンポジウムでは、NHKであいついで放送された3つのドラマ『カーネーション』（岸和田ことば）、『八重の桜』（会津ことば）、『あまちゃん』（岩手県の架空の町「北三陸市」のことば）を主たる題材とし、ドラマにおける方言の機能をめぐって、研究者と制作スタッフ双方の視点から論じ合われた。まず金水敏（役割語研究）、田中ゆかり（ヴァーチャル方言研究）、岡室美奈子（ドラマ研究）がそれぞれの研究の立場からの分析を披露し、後半では『カーネーション』のことば指導を担当した俳優林英世氏、『八重の桜』の制作統括を担当した内藤慎介氏、『あまちゃん』の制作統括を担当した菓子浩氏を迎え、ドラマの制作現場における方言の取り入れ方、接し方等について金水、田中、岡室が公開インタビューを行うという構成になっている。

金水は、フィクションの会話文の特徴から、ドラマにおける方言の取り入れ方を本格方言ドラマ、方言ほどほどドラマ、方言回避ドラマに分類する観点を示した。田中は、『カーネーション』『八重の桜』『あまちゃん』の方言を具体的に分析し、特に『あまちゃん』が画期的な「方言コスプレ」ドラマであることを述べた。岡室は、ドラマ分析の観点から、それぞれのヒロインの特徴と方言の関わりについて分析を示した。後半の公開インタビューでは、『カーネーション』を他の関西ドラマと一線を画し、他のどこでもない岸和田のドラマであることを方言で示そうとしたこと、『八重の桜』では三人もの会津ことば指導がついて会津方言らしさの表現に力を注いだこと、『あまちゃん』では一人ひとりのキャラクター設定にそった方言の濃さが調整され、リアルな方言というより「あまちゃん」語というべき言語が生まれたことなどがドラマの関係者から語られた。

『コレモ日本語アルカ？』は、「これ長生きの薬ある、飲むよろし」のような、多く中国人

の表象に用いられる特異な役割語〈アルヨことば〉の発生、展開と衰退について、日中を中心とする国際関係史の中で描いている。まず、〈アルヨことば〉の前史として、幕末～明治初期に横浜開港場で発生した横浜ことば（横浜ピジン）を取り上げる。横浜ことばは西洋人、中国人と日本人の間でのコミュニケーションに使われた言語で、「あります」「よろしい」という特徴的な文末表現を持つ。大正年間あたりまでフィクションでも用いられたが、入れ替わるように「ある」「よろしい」という文末表現を持つことばが中国人話者の描写の中で用いられ始めた。この「ある」と中国人の結びつきについては、1879（明治12）年刊行の *Exercises in the Yokohama Dialect* 改訂増補版で Nankinized Nippon（南京訛り日本語）として現れるのが早いですが、フィクションで用いられるのは1920年代を待たねばならない。ちょうどこの頃、中国人労働者や大道芸人、行商人が多数日本で見られるようになり、日本人の中国人観が大きく変わった時期でもあった。「ある」「よろしい」が現れる〈アルヨことば〉は大正年間までは必ずしも中国人の表現として標準的なものではなかったが、1930年代、満州事変、盧溝橋事件を経て日中戦争に突入するころから、日本のポピュラーカルチャー作品の中で盛んに〈アルヨことば〉が用いられるようになった。この表現は戦後にも受け継がれることとなったが、カンフー・ブームやチャイナ少女など新しい中国人表現とも結びつき、やがて力を失っていく。一方、本書は戦前の満洲国で発生した満洲ピジンとも言うべき言語が〈アルヨことば〉の源泉ではなく、むしろ満洲ピジンが〈アルヨことば〉の影響を受けている可能性を示している。この満洲ピジンに似た表現は今日まで中国における抗日映画・ドラマの中で日本人軍人の表象に用いられている。

この他、2014年9月には研究社から『〈役割語〉小辞典』も刊行された。『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店、2003）刊行から10年以上が過ぎ、2015年2月には一般公募の研究発表による「役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ」も実施された。役割語研究は言語研究の中で一定の地歩を固め、新たな局面に入ったと言えるかもしれない。

金水 敏（きんすい・さとし）

大阪大学大学院文学研究科教授／国立国語研究所理論・構造研究系客員教授。博士（文学）（大阪大学）。

主な著書・論文：『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店、2003）、『日本語存在表現の歴史』（ひつじ書房、2006）、『役割語研究の地平』（編著、くろしお出版、2007）、『役割語研究の展開』（編著、くろしお出版、2011）、『歴史語用論の世界』（共編、ひつじ書房、2014）。

受賞：日本認知科学会論文賞（1991）、豊田実賞（日本英学史学会、1992）、新村出賞（新村出記念財団、2006）。

社会活動：日本語学会評議員・前理事・副会長、日本語学会評議員・編集委員長、日本語文法学会前会長。